

日曜聖書講筵（婦選会館 公開集会）

神の子

――マルコ伝3章7～11節――

1964年6月21日

小池辰雄

押し迫り 立ち帰り 急降下電撃 キリストにぶつかって降参 キリストの生命賭けの迫り
十字架への突破 あなたこそは神の子 我無き我 啓示的事実 無的実存 御霊の押し迫り
永遠の霊生 神の子 絶対恩寵

【マルコ3:7～11】（私訳）

7それからイエスは弟子たちを連れて、海辺に退いた。また、多くの群衆がガリラヤからついて来た。またユダヤから、⁸またエルサレムから、イドマヤから、さらにはヨルダンの彼岸から、ツロ、シドンのあたりからも、彼のなさることを聞きおよんで、彼のみもとに来了。⁹ところで、イエスは弟子たちに舟を身近に留めておくように命じた。それは群衆が彼に押し迫って来ないためであった。¹⁰というのは、彼が多くの者を医^いしたので、病苦に悩む者はみな、イエスに触れようとして、彼に押し寄せて来たからである。
¹¹また穢^{けが}れた霊どもはイエスを見るごとに、御前に平伏し叫んで『あなたこそは神の子です』と言った。¹²イエスはご自身を躪^{あらわ}さないようにと彼らを厳しく戒めた。

●押し迫り

大体、現行訳でいいようです。今日は「神の子」と題しましたので、こういうことになりますか。内容は無限です。

イエスは弟子たちを連れて、ガリラヤ湖畔に退いた。また、多くの群衆が、ガリラヤからばかりでなく、南の方のエルサレムから、イドマヤから、さらには東側のヨルダンの彼岸から、そして西方の地中海沿岸のツロ、シドンのあたりから来た。非常に広範囲から、既にイエスの令名が聞こえて、大群衆が集まってきたわけです。近頃の新興宗教にもずいぶん人が集まるようですが、イエスも確かにこの時、一種の新興宗教でありましたが、人々が押し合いへし合いやって来た。

「舟を身近に留めておくように」

というのは、とにかく群衆を避けるために、舟に乗って、そこからお話をすること



があつたようです。それほど、イエスはいわゆる人気者になつてしまった。その人気の原因は実に卑近なもので、要するにキリストが不思議な業をなす。特に病を癒されたという――片っ端から難病が治つていく――イザヤ書35章に言われているようなことが現実に展開していくというわけです。

大体、宗教というものは、その御利益的な靈驗あらたかであるということが、宗教がのびる、とにかく群衆が集まつてくる大事な特色であるわけです。いろいろな宗教の始まりにおきましては、教祖的な人はみなそのような、何らかの意味において、力を持っている。単なるお説教ではない。今、「神はわが力」という讃美歌を歌いましたが、力が人を引きつける。イエスの場合も、宗教現象的にいうならば、比較宗教学的にいうならば、そういうことが一応言えるわけです。

私はこの記事を見ていて、一体どこに今日の記事の或る一つの鍵があるだろうか、何回も繰り返して読んだが、なかなか見つからない。「神の子」というのはあまりに神学的な概念のように聞こえます。読んでいるうちに、ハツと思つた。それは9節に、

「それは群衆が彼に押し迫つて来ないためであつた」

とある。また、10節に、

「イエスに触れようとして、彼に押し寄せて来たからである」

とある。この「押し迫る」とか「押し寄せる」という、この言葉に注目したわけです。東西南北からひしめき寄つて来た。キリストに肉薄して来たわけです。群衆は、イエスが非常な人物である、非常な力を持っている方である、どうも不思議でならないといういろいろな好奇心や、どうしても治してもらいたいという病氣、そういったようなことで、とにかく押し寄せて来た。潮の如く、正に人間の潮の如く押し寄せて来た。この押し迫りです。

今のキリスト教の世界において、教会に、集会に、幕屋に、この押し迫りをもつてみんな集まつて来ているだろうか。芝居や映画は、我先きにと券を買う。また汽車の切符も、やれ急行券だ寝台券だと、みなこれは押し迫つて買う。他の面白いことや、いろんな人間の文明の世界の現象においては、今たくさんこの押し迫りを見るわけです。押し合いへし合いという。朝の電車のラッシュアワーでも、この押し迫りです。駅員が押し込んだりする。押し迫り、押し込みは、私たちは平常、非常に見ているわけです。また、自分でも体験しているわけです。

ところが、宗教の世界は、新興宗教に押し迫つてくるという一面の現象はあります。偉大な仏教、偉大なキリスト教、今までとにかく世界歴史をその根底において推進力となつていたところの宗教には、数からいっても、レットルのクリスチャン、レットル仏教徒という数は世界で多いわけです。やはりキリスト教が第一で、マホメット教がその次になつていくかも知れませんが、ヒンズー教も相当あります、仏教というわけです。とにかく、キリストと釈迦というような人物には比肩する者はいない。また、その宗教から発している



全体の、数における勢力というものは、それは大きなものです。けれども、事実、今、このような押し迫りをもつて、キリスト教の世界における集会、教会というものに押し迫りがあるか。残念ながら一般的には非常にそれが無いわけです。例外もありましょうけれども。そういう意味において、とにかく、押し迫りというこの事態、これは我々は読み過ぎることのできない事態であると思う。必ずしも、この集会が超満員になることを必要とはしない。皆さん、一人びとりの来かたが、この押し迫りの来かたであるか。もちろん、私は我々の集会が普通の集会と比べて、皆さんが義務で、いやいやで来てらっしゃる方は一人もないと思います。皆さんは喜んで、この押し迫りをもつてやつていらつしやると信じます。しかし、我々のこの押し迫りというものは、これでいいということはないのであって、我々の押し迫りは、こないだからしばしば出すところの、生命賭けの押し迫りです。生命を賭けての押し迫りという、質的な押し迫り。千里を遠しとせずしてやつて来るといふ、そういう押し迫りです。これは我々一人びとりが、いわゆる距離的に近かろうが遠かろうが、みな同じ質を持った、生命を賭けての押し迫りというものを非常に重要な問題とすべきであると思います。

●立ち帰り

正直、群衆はこのようにして押し迫つてまいりました。キリストはその切ない求めを――疑っている者や、抵抗している者はダメですが――切なく求めている者は、キリストは片っ端からその願いを聞いていらつしやる。

「これをすべて癒したまえり」

なんて所々に書いてある。特に、福音書を読んで、そこに出てくる事柄で一番著しいのは、何といつてもやはり癒しのことです。病の癒しという現象が一番多く出ている。虚心坦懐に読んで、そうです。また、それだけ、福音書は蹟きをきたらせる面を持っている。

「我に蹟かざる者は幸いなり」

と言われたのは、必ずしもそういう意味ばかりで、キリストは言われたわけではありません。んけれども。この福音というものに蹟いてはいかん。我々は、新興宗教の押し迫りに対して、ただ

「新興宗教なるが故に」

と言って、これをむげに否定するわけにいかない。何か、そこに現れている押し迫りというものには、認むべきものがある。福音の光というものは、何でも、認むべきものは認め、限界を知り、必要をわかまえるということが出来るわけです。観念的に切つてしまわない。それでは、その押し迫りの度合いはいいが、その質その内容は如何にということに福音の問題があるわけです。即ち、群衆は病の癒しを大体、中心問題としている。

「自分は罪に苦しんでいる、自分は魂にどうも平安がない、何とかしてください」



というような角度から、追い求めている記事は福音書にあるでしょうかと聞いたくらいです。ところどころ、それを思わせるものはあります。けれども、はつきりそこに打ち出しているものはどうでしょうか。キリストの譬話のルカ伝15章のところは正に、魂の苦しみをもつてきたわけですが、そこがイエスの福音の福音たるところですが。あのルカ伝15章の放蕩息子^{たえ}は即ち、

「自分はもう父の子ではない、それにふさわしからざる者だから雇い人として自分を今度は雇ってくれ」

と。実の子どもが自分を雇い人としてくれという、この謙り、砕け、平伏しというものを、キリストは非常に評価されたわけです。絶対無条件にキリストはそこで赦すということが、あの放蕩息子^{たえ}の譬話です。譬話といいますが、我々はいかにそのような事実が我々の間の現実であるかということを使うときに、ちょうど、旧約聖書のいろいろな神話的なお伽話^{とぎ}みたいなものがやはりただ神話として、お伽話として受けとれないのはみな、聖書はそのような物語や神話的な衣をきて、実は現実を語っているというものですので、迫ってくるわけです。キリストのルカ伝15章の譬話における放蕩息子の帰還というものは、立ち帰るけれども、立ち帰りつつ、

「お父さんに怒られるから、どこか他の人に頼もう」

ではなくて、やはり父のもとの他に帰るところがない、帰り行くところはただ父のみであるという、ここに本当の救いをキリストは語っておられるわけです。

あれもやはり、止むにやまれないところの押し迫りです。行き所がない。進退極まって、ただ元へ帰るだけです。その意味において、病の、肉体の欠陥の、根本のもう一つ奥の問題としての、魂の押し迫りなんです。肉体の欠陥は――結構ですよ、おおいに癒してもらいたいということは――それは誰も切実なもので、決して水を割る必要はない。その欠陥を一つの契機として、神さまにお願いする。しかし、肉体が癒されたとして、人間は、

「それでめでたし、めでたし」

というものだろうか。人間の一番の喜び、一番の平安、一番の健やかさというものは、どう考えても、その一番中心であるところの魂の健やかさであり、魂の健やかさを求めている押し迫りです。魂の健全を求めている押し迫り、これを要求しているのが福音です。

他のいろいろな新興宗教において、果たして魂のそれだけの健全な押し迫りが中心問題、根本問題となっているか。相当問題であると思われまします。というのは、その宗教が果たして、文化的な意味において、人間の社会というものをもつとも健全に展開していくところの一番の原動力となるか、ということを考えるときに、いろいろな現象を見ても、実にそれは道義的にまた社会道徳的に問題性をもつたものがたくさんある。あるいは、それが政治の問題に関わってみたり。そういうようなことで、その宗教が健全であるかどうかがよく分かるわけです。



何と言っても、このキリストの福音は最も健全なるものを持っている。仏教ももちろんこの福音にはかなわない。特にその点で一番大事な役割を果たさしめられたのはパウロですが。パウロが展開しているところの福音の構造というものは素晴らしい。

●急降下電撃

押し迫りの対象およびその内容というものに福音の問題がある。

「群衆は押し迫ってきた」

というのですが、イエスという人が天界のキリストたる存在から、この地界に急降下、電撃してしまう。急降下してしまう。しかも、これは電撃的です。

今は飛行機の世界です。何と言っても、飛行機というのは一番素晴らしい文明の利器です。地上では自動車でしょうけれども。しかし、遠い距離になったら、もう自動車ではどうにもならない。海がある。飛行機は海があろうが、山があろうが、一切のものを乗り越えて、直ちに目的地に向かつて、一直線に進んで、これに急降下して降りていきます。そういう驚くべき飛行機です。

霊界から、絶対界から相対界に、霊界からこの現世の現^{うつ}世の世界に、急降下電撃して来た存在。それがイエスです。この攻撃たるや、群衆の押し迫りどころの騒ぎではない。この「攻撃」という言葉をバルトが使っている。さすがに、バルトという神学者は素晴らしい角度を持っています。キリストは我々に攻撃して来た人である。電撃、攻撃してきたところの、このキリスト。我々の一切の常識、理性、判断がもう批判を許さないところの事実として臨んできた。これが

「言が肉となれり」

ということなんです。「言が肉となった」という「受肉」という神学上の言葉ですけれども。霊的実在が我々の相対的普通の人間となつて、そこに現象した。どのような哲学的説明もあるいは文学的表現も、どうにもならん。言が肉となった。この驚天動地の、空前絶後の事態の前に全く圧倒される。この電撃に全く圧倒されている。降参しなければ、このイエスという人に本当にでつくわしたということにならない。

●キリストにぶつかって降参

「神の子」と言いまして、決してこれは頭でもつてただ整えたような把握をしたってどうにもならん。かえって、それは信仰から遠ざかってしまう。「使徒信条」や何かを暗記してみたって、それはダメですよ。使徒信条なんていうのは、教会でしょっちゅう繰り返し唱えられている。我々はよく知らないでしょ。使徒信条を今暗誦して「あらんと言われたら、誰か暗誦できますか。それくらい、私たちは、そういう意味においてはダメなんだ。ダメでよろしい。」



そうではなくして、キリストが、霊的な実在者がこの相對界に現れて、彼は誠に――ただそこに神的なものが現れたとか、宗教的天才であるとか、そんなことではない――神の具体的な現象である。私たちはいくら神を瞑想したって、神さまは掴めない。我々が「神」と言うときには、キリストという方がありありと浮かんでこないならば、「神」と言ったって、それは空言です。テオロギー、クリストロギー、プノイマトロギーという。神学でキリスト論が、何と言つても、この福音はキリストが中心です。本当の意味における認識の中心は、対象はキリストである。キリストを見ない限り、キリストに聞かない限り、キリストに掴まれない限り、我々は「神」と言うこともできなければ、「聖霊」と言うこともできない。キリストという事実福音書でぶつかって、もし、

「少し分かりました」

とか、「分かった」とか言うなら、それは嘘です。福音書にぶつかって、

「分かりません。どうも、それは分かりません。どうにもなりません」

と言つて、自分の意志も感情も知識も一切、そこに降参する。自分の何か持っているもので測れない。測れるから「分かる」というんだけど、測れない。測れないから「分かる」と言えない。自分の尺度では、それは測れません。自分の物差しではどうにもならん。

「分らない」

と言つて降参する。

キリストに肉薄したい。迫りたいんですが、迫つてみたけれども、ダメなんだ。そこに降参してぶつ倒れてしまう。自分の手では届かない。自分の目では見えない。自分の耳では本当は聞こえない。それで、ぶつ倒れると、目が開け、耳が聞こえ、キリストに手が届く。

「掴まれているから、掴むことができる」

と言うなら、それなら分かる。それが福音の把握ということです。

「驚くべきキリストという方は我々に神を現している」

と言うならば、我々には実は分からない。分からないけれども、絶対無縁の衆生しゅじょうではない。本来私たちは神の似姿に造られていた。けれども、どうにもならん。少し分かるようだが、実はそうではない。少し聞こえるようだが、少し見えるようだが、実はそうではない。

そういうのが、本当にキリストにぶつかって降参するところの事態なんです。一番大事なのは、私たちの実存そのものがキリストにぶつかって、キリストのぶつかりで降参です。モーセの十誡にぶつかるよりも、我々は山上の垂訓にぶつかって、降参する。

●キリストの生命賭けの迫り

キリストが海の上を涉つたとか、いろいろな不思議な業をなさったということよりも、イエス・キリストの実存そのもの、父と共に歩かれたその実存そのものが奇蹟中の奇蹟である。それは福音書の言葉がなお伝えないような、文字の奥から響いてくるところの、驚くべき



キリストの事態というものです。キリストの我々に対する言葉をもつてするところの迫り、業をもつてするところの迫り、存在そのものをもつてするところの迫り、これは群衆の押し迫りというものとは桁が違う。キリストの御言の迫りと御業の迫りと存在そのものの迫りというものがとにかく、群衆をして押し迫らせたところの原因なんです。なぜ、群衆は押し迫ったのだろうか。それはキリストという驚くべき迫りというものに驚いた。彼らは御利益として掴んだかも知れないけれども、御利益の奥のキリストの迫りは彼らには分らなかったかも知れないけれども、そのキリストの迫りというものは彼らに、とにかく見当違いであろうとも、キリストに押し迫らせた。それが即ち、その電撃であり、攻撃であり、キリストの迫りである。

私たちは生命を賭けて迫らなければ、福音の世界は本当に入れない。福音は易行道であるが、しかし、その易行道はまた、全く逆説的に難行道でもある。いわゆる難行苦行ではありませんけれども。安易なものではない。この生命を賭けての迫りを要求するものは、実はイエス・キリストの迫りが生命賭けの迫りである。ついに彼は十字架の上に自分の生命を架けたではないですか。十字架の上に自分の生命を架けられたところの、このキリストの生命賭けの迫り。私は、そこへ来ると、もう声が詰まってしまう。その迫りは自分の力みではない。自分の力みでないところの生命賭けの迫りというものを、キリストが私の中に、あなたの方の中に、呼び起こし発動せしめ給う。生命賭けの迫りが実は、難行でありそうで、また実に易行であった。易行でありそうで、また難行であった。これは説明できない。絶対矛盾です。絶対矛盾の自己同一です。この「絶対矛盾の自己同一」的な事態を、キリストの迫りが私たちに迫りを呼び起こし給う。居ても立ってもいられないところの生命の発動が我々の中に呼び起こってくる。何ということでしょう。何という有難い事態でしょう。これが彼らがとにかく根本的に意識するとせずつとに拘らず、群衆が押し迫らしめられたところの原動力である。キリストに押し迫ってきたところの群衆の中に発動しているところの何ものかは、このキリストの驚くべき押し迫りが、その御言、御業の驚くべき押し迫りが、彼らの中にそういうものを呼び起こす。

私たちの集会がそのような、キリストの御言・御業・全存在から来るところの迫りに呼び起こされて、集会に臨んでいる迫りというものである。それでなかったら、我々は自ら集会を放棄する。生命を賭けての迫りはもはや、力みでも何でもない。生命を賭けての迫りをキリストから迫られていくのです。

●十字架への突破

キリストが、

「押し迫って来ないために」

と、あまり彼らが押し迫って来てしようがない。自分は押されてしまつて、ちょうどプラ



ットホームから落ちるように、海の中に落とされてしまうよ。だから、小舟の中からお話をしようというようになる。けれども、キリストは、その群衆の迫りにおいて自分の本願に対する悲願のある姿を見ているわけです。やがて、地の極^{はて}までも世の末までも、そのような迫りの行き渡りが来ることを、おそらく見ておられる。全世界にこの迫りの潮^{うしほ}が広がりました。キリスト教は、どんなにみんなが不信になりましたも、石ころからアブラハムの裔^{すえ}を起すような事態です。この福音はそれ自らの力をもつて進んで行きます。キリストそのものの迫りが、聖霊の迫りが起こって参ります。

マルコ伝3章9節、10節のこの群衆の押し迫りというものの奥に、私たちはイエス・キリストの驚くべき押し迫り、攻撃をひしひしと感ずるわけです。けれども、群衆は押し迫ってきたが、それはみんな御利益を求めての話であつた。彼らはそのイエスの正体が見えない。とにかく、自分たちは治してもらいたい一念です。キリストは憐れみ深いから、治してやりますよ。けれども、キリストは彼らを治しても、彼らの魂が本当に救われたとは思いません。その時は、自分がついに生命を賭けての――十字架への生命賭けのキリストの突破です――この突破をしてから、やがて彼らを本当に救う時がくる。そのために仕える者たちがある。この次に出てくるところの十二使徒です。十二使徒の中からまた選ばれた人たちということになります。

●あなたこそは神の子

ところが、11節にみると、

11 また穢^{けが}れた霊どもはイエスを見ることに、

正にこれは反復している。「見ることに」という。

見ることに、御前に平伏し叫んで

とにかく、キリストには敵^{かな}わないものだから、御前に平伏し、しかも、叫んで、

『あなたこそは神の子です』と言った。

マタイ伝16章16節に、13節から読みますと、

「13 イエス、ピリポ・カイザリヤの地方にいたり、弟子たちに問いて言い給う

『人々は人の子を誰と言うか』^{あるひと} 14 彼等いう『或人はバプテスマのヨハネ、或人

はエリヤ、或人はエレミヤ、また預言者の一人』

それくらいにしか、イエスを認識していないわけです。

15 彼らに言いたもう『なんじらは我を誰と言うか』¹⁶ シモン・ペテロ答えて言う

ペテロは弟子中の子でありましたから、

『なんじはキリスト、活ける神の子なり』¹⁷ イエス答えて言い給う『バルヨナ・

シモン、汝は幸福^{さいわい}なり、汝に之を示したるは血肉にあらず、天にいます我が

父なり。』(マタイ16・13～17)



おそらく、そこまではキリストのその時の言葉でしょう。その先は付け加えであろうと言われている。キリストがガリラヤ伝道を終わって、エルサレムの方に向かっていよいよ最後の旅にのぼられる前に弟子たちと山の方へ散歩された。その時の問答です。ペテロが

「あなたはキリスト、活ける神の子である」

と言った。この言葉を聞かれて、キリストは非常に喜ばれて、

「これは父の霊がお前に示したんだ」

と。よほど終りになって、使徒の第一弟子がそう言った。ところが、まだ伝道の始めの頃です。マルコ伝にも5章の所に出ています。悪霊に憑かれた人が、悪鬼のやつがやはり同じようなことを言っている。5章7節に、

「7 大声にて叫びて言う『いと高き神の子イエスよ、我は汝と何の關係あらん、神によりて願う、我を苦しめ給うな』」（マルコ5:7）

と書いてある。これがやはり、穢れた霊に憑かれた者の中から穢れた霊がそう言った。

「汝こそは神の子です」

と、ここでもそうですね。「イエスを見ることに」と言うから、時々こう言つて、彼らはイエスを表したんだな。そうしたら、イエスは厳しくこれを戒めて、

「私を表してはいかん。まだその時ではない。早すぎる」

と言われた。霊界にタッチしているところの霊は、キリストが神の子であることが見えるわけです。一番、キリストに肉親的に近い人たちが却って分からない。

「この頃、だいぶ風変わりなことをしたり言ったりしているが、ちよつと変だな」なんてなわけだ。

「預言者はその故里には容れられず」

と言つて、ナザレをキリストは出てしまった。ナザレでは神の業が現象しない。彼らはこれを受けとらないから。物理法則ではないから。

穢れた霊は、霊界の消息とにかく触れているから、自分たちの穢れとは違って、

「清らかな神の霊をもった神の子である」

と言つて表した。我々と全く同じ一人の人間でありながら、また同時に、彼は神の子である。もうひとつ言うと、人の子でありながら神の子である――「人の子」という表現は特別な意味を持っていますけれども――普通の言葉として、人の子でありながら神の子である。

●我無き我

へブル書4章14節のところを見ると、

「¹⁴我等には、もろもろの天を通り給いし偉なる大祭司、神の子イエスあり。然れば我らが言いあらわす信仰を堅く保つべし。¹⁵我らの大祭司は我らの弱きを思い遣ること能わぬ者にあらず、罪を外にして凡ての事、われらと等し



く試みられ給えり。16 この故に我らは憐憫を受けんが為、また機に合う助けとなる恵みを得んがために、憚らずして恵みの御座に来るべし。」(ヘブル4・14、16)

そのようにイエスは人間性を深く持つておられる。我々の弱さをすべて知つておられるばかりでなく、自ら負つておられる。罪の誘惑ももちろん知つておられる。人間の心理の奥をよく弁えておられる。それは山上の垂訓を見ればよく分かる。また、弱さを持つておられたから、常に神に祈つておられた。

「私の意ではなく」

と。「私の意」というものはキリストにもあつた。けれども、この「私の意」が主体となつて動いては大変である。

「あなたの意です」

と言つて、「あなたの意」を常に「私の意」に切り替えて動いておられた。これが

「汝の御意を我を通して成らしめ給え」

というキリストの悲願であつた。それを実践して来られた。

「我」というものをキリストはちゃんと持つておられる。そして、「汝」というものを常に相手としている。この「汝」が常に主動体であるところの「我」なんです。汝における我なんです。何かただ空漠たる無ではない。「汝における我」というこの我は、無我の我です。「我無き我」というものがキリストの我である。私たちは「我無き我」にはなかなかなくて、直接の我ですけれども。それで滑つたり転んだりしている。けれども、キリストにおきましては、「無我の我」という、常に汝が主辞でありまして、我が賓辞である。汝が主語で、我は客語である。こちらが賓客なんです。

汝と我。もう少し分かりやすく言うと、汝の中に入っている内接円的な我です。「汝」というのはもちろん「神」という汝です。もう一つ言えば、「父」という汝です。そして、「我」という「子」です。汝と我との関係が実にはつきりしている。汝は汝にして、我は我なんです。それらは人格なんです。人格体ですけれども、それは霊的人格です。「的」なんていう言葉はあまり実にはよくない。霊の人格ということ。この霊的人格として、汝を常に立てて、汝を主語としている我。我は汝における奴隸意志である。これが、マルチン・ルターが言つた「奴隸意志論」という、自分は奴隸意志なんです。キリスト者はキリストの奴隸意志として、キリストの意志を立て、自分を奴隸意志の存在として動いている。パウロがそうです。「我はキリストの僕」と言つた。僕である。主人の命令に従つて動く者。その主人の命令に従つて動き、汝の命令、父の言葉に従つて動いている我。これが「無我の我」というもの。「我は我、汝は汝」でありながら、汝と我とは一つである。

「我を見し者は父を見しなり」(ヨハネ伝14章)

と、それでそれが言えたわけです。



●啓示的事実

神の「言」、そして人間という「肉」。言と肉は、その意味において、神と人ということである。神人。キリストは神人である。神であり同時に人であるという神人です。何か神秘的な神々しい人ということではない。そういう絶対矛盾の自己同一ということが、哲学的概念としてではなくて、啓示的事実として実証されているわけです。それは啓示の事実なんです。啓示の事実でありまして、我々の相対的現実の事実をぶち破るところの事実なんです。日の下に例外的な事実なんです。日の下におけるところの、歴史におけるところの、例外的事実が歴史の中に現れて、歴史的事実を破るところの、歴史的事実という実に驚くべき現象なんです。これがイエスというものです。

私は今日はただ神学の講義をしているわけではない。あなた方は、これを神学的な気持ちで受けとったらダメです。そういう、事実を破るところの事実。そうでなくして、どうして我々に救いが来るか。観念や理想を掲げられて、「これのようにせよ」と教えられても、どうにもならん。何か神秘的な摩訶不思議をやられて、その中に酔えと言ったって、それは本当の健全なものではない。どこまでも、所与の現実の中に、この現実の根底を救い上げるところの驚くべき啓示的事実が展開していく。だから、地上にあるキリストにどんなに恵まれようとも、どんなにキリストにしがみつこうとも、その人は救われはしない。

一体、キリストの事実の中に流れているところの何ものかは何であるか。それは御霊という第三のものです。「父・子・御霊」という。「父」といい、「子」といい、このことはキリストにおいて「御霊」がこの不思議な事実を現象させているところの奥義である。秘義である。ミステリオンである。だから、聖霊が本当に開示してくるところでなければ、「福音」なんて言ったって、「聖書」なんて言ったって、いくら読んだって、いくら勉強したって、いくら研究したって、それは掴めませんよ。

●無実の存

少しく、聖書にぶつかってみましょう。ローマ書8章14節、

「¹⁴すべて神の御霊に導かる者は、これ神の子なり。」

神の御霊に真に、十全的に、全的に導かれ貫かれていた者はキリストであった。イエスであった。イエスは、その意味において、奇蹟中の奇蹟の人物です。「奇蹟」というと、何か摩訶不思議というような気持ちにみえて、よろしくありませんけれども。実は最も天的必然の世界です。一番素晴らしい天的必然を奇蹟という。

申し上げている通り、キリストは完全に自分は何もできない。

「我、何事をも為し能わず」

と言う。「善き先生」と言ったら、

「なぜ、我を善きと言うか。神の他に善きものなし」



と。彼はみんな自分を否定している。自分は何ものでもない。無である。無者である。実存的に無なる者である。「実存、実存」と言うけれども、無的実存とはキリストのことである。私は『曠野の愛』誌33号で書いた。時々読み返してくださいよ。どの号といえども、私はいいい加減な気持ちで書いているんじゃないんだから。自分の書いたものを言つて申し訳ありませんけれども、私は自分でまた、自分の書いたものを時々読む。そして、

「ああそうか、そういうように示されたか」

と、またそこで教わる。これは私は考えて書いたんじゃないんだから。示されて書いているんだ。どこまでも真理は神さまのものですから。私は私してはいけないんだ。真理は神さまのもので、その神の真理の前に平伏するのであつて、自分がどうのこうのではない。「無的実存」というのがイエス・キリストである。この無というのは虚無ではない。自分を放り出して、何ものともしないところの、この不思議な我というものの中に、もの凄く迫つて来た、肉薄して来た。これも驚くべき押し迫りをもつて押し込んで来た。それが御霊である。

「聖霊が鴿の如く――或いは、滝の如く――彼の中に臨んだ」

という。キリストがバプテスマを受ければ、御霊のバプテスマを受けた。洗礼のヨハネが

「私よりも後に来る者は聖霊をもつてバプテスマする者である」

と言つたように。パウロが

「御霊を宿さざる者はキリスト者にあらず」

とローマ書8章の始めの方に書いてある。

「9 然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る。」

キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。(ローマ8:9)

と。イエス・キリストの御霊は、どんなにキリストと地上でもつて目と目を相合わせていようが、その人の中に入つて来なかつた。申し上げている通り、それはキリストが十字架を通つて、私たちの知ると知らざるにと拘らず、なお我々が神に敵しているときに、彼は我々のために生命賭けで生命を架けて、贖罪という大業をなさつた。

人を見ているうちはダメです。自分が、自分の過去も現在も未来も、この十字架に架けられて、「我はもはや救われたる者なり」との、この驚くべき恩寵の中に常に新たに展開していく人は必ず、神の、キリストの似姿に化していく人になる。

●御霊の押し迫り

そういう、十字架の贖罪のこの事態をはつきりと身をもつて受けるところに――御霊は来たらざらんやという――御霊の押し迫りがあるんです。

今は、東京なんていう所は押し迫りの世界だから、いろんなものが押し合いへし合いしている。けれども、どうか、皆さん、そんな押し迫りはどうでもいい。この御霊の押し迫りを受けていただかなくては。いつでも目をつぶつて、電車の中でもどこでも目をつぶつ



て祈りの世界に入って、キリストを、十字架のキリストを受けとる。キリストは、

「生命を賭けて、私は霊をもつて汝の中に押し迫る。生命を賭け、十字架に架かって、
霊をもつて汝の中に押し迫る。」

と。パウロは御霊をいただいていたからです。御霊の押し迫りをいただいたパウロは、本
当に押し迫り押し迫って、ついにイスパニアにまで、地の極にまで伝道せんとして行き、
ローマにおいてぶつ仆れた。私たちの生涯も、そのような御霊の押し迫りによって押し迫
りながら、道に仆れるような在り方をしたいものだ。そういう人生が本当の人生です。青
年諸君は、大いに、この御霊の迫力をいただいでください。この夏は何とかして、そうい
った深い祈りの世界に入ってみたいと思います。

もはや、聖書の研究だとか、何とかかんとかいう、そういう次元ではない。私はこのマ
ルコ伝3章の7節から12節のところを読んでいて、群衆の押し迫りというところから、イ
エス・キリストの押し迫りに来ましたから、何とこは素晴らしいところではないかと、
昨日から示されていたわけです。私は昨日、キリストに霊撃されたんです。昨日のほとん
ど夜12時を少し過ぎた頃です。それまでいろいろ仕事をしていたから。さあ、明日の準備
だが、どうしたらよいものかなと。聖書を訳し出してから、これがやはり、急降下電撃で
キリストに迫られたわけです。行き詰まりを知らんですよ、この御霊の世界は。

「^せ為んかた尽くれども、望みを失わず」

という。どんなに、気がくさりましようとも、滅入りましようとも、この突破ができなか
つたら、我々はクリスチャンではない。この押し迫りは、驚くべき突破をさせてくださる。

●永遠の霊生

御霊というものは、イエス・キリストの神との全き交わりの中にいて、彼が神の子であ
ることを、御霊におけるところの事実が証明している。そして、それは我々にその御言と
御業をもつて、全存在をもつて、十字架をもつて、最後にはその復活という驚くべき事実
をもつて証明している。

「もし、甦えり給わざりしならば、我らの信仰は空しい」

とパウロが言った。これが、墓を突破し、死を征服し、サタンをやっつけ、陰府を征服し
たところのイエス・キリストの甦えりの生命、永生というものの、永遠の霊生です。これが
完全に――釈迦がただ涅槃だとか、「ニルバーナ」とかというようなことではなくして――
ニルバーナの世界よりもはるかに積極的な生命そのものの勝利の世界です。御霊の原始核
を持たずして、なんで私たちが「福音」なんて言っていられるか。

「今日、死んでもアーメン・ハレルヤ。私は死にません」

と言えるのでなかったなら、なんの信仰ぞや。そうだよ。あなたの方の中にも、何かはち切
れるようなものが躍動しているかな。



「創価学会が何万人いようと、何をか」

と。「何をか」というものがあなたの方の胸の中に本当にあるだろうね。そんなことでタジタジするようなことではどうにもならない。そんなのはクリスチャンじゃない。

私は「福音書のキリスト」と一言いうだけで、もう言葉がない。百万の書よりも、ただこの四つの福音書だけを携えて、日本中を歩くことができる。福音書だけを携えて、日本中を伝道しようかという悲願を持ちたいくらいです。私の血は、そのようなものでいいよ。よたぎっております。「地・水・火・風」を語ってから、私は正直、変わってきたんです。皆さん、旧き私なんかを考えては困るよ。そういうように、皆さん一人ひとりも、それぞれの人生において、展開また展開していく。キリストのこの迫りは

「キリストの愛、我らに迫りて、この生命をいかんせん」

とパウロが別なところで言っている。

●神の子

少しまた開きましょう、ルカ伝9章26節。ヨハネ伝を引つ張ったなら、たくさんありますが。ヨハネ伝というのは、「神の子」の福音書と言ってもいいようなところですよ。

「²⁶我と我が言とを恥づる者をば、人の子もまた己と父と聖なる御使たちとの栄光をもて来らん時に恥ずべし。」（ルカ9・26）

また、10章21節、

「²¹その時イエス聖霊により喜びて言いたもう『天地の主なる父よ、われ感謝す、此等^{かしこ}のことを^{さと}智きもの^{みどりご}慧き者に隠して^{あらわ}嬰兒に顕したまえり。父よ、然り、此^{かく}のごときは御意に適えるなり。』」（ルカ10・21）

それから、11章の13節、

「¹³さらば汝ら悪しき者ながら、善き賜物をその子らに与うるを知る。まして天の父は求むる者に聖霊を賜わざらんや」 （ルカ11・13）

まあ方々に、「父」と言ったり、あるいは「御霊」と言ったり、「御子」と言ったり、そういったようなところを探って行つたら、きりが無い。

ヨハネ伝3章16節が非常に典型的な一つのところです。

「¹⁶それ神はその独子^{ひとりご}を賜^{たま}うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信ずる者の亡びずして永遠の生命を得んためなり。」（ヨハネ3・16）

なぜ、「永遠の生命」であるか。「独子を賜う」というのは、私たちにおいて、独子において本当に御霊をいただく。そして、私たち自身が神の子とせられるということが、ローマ書やなんかにも出ているわけです。ガラテヤ書3章26節も、そうです。

「²⁶汝らは信仰によりキリスト・イエスに在りて、みな神の子たり。」（ガラテヤ3・26）



と。また、非常に驚くべきところが一つある。ヨハネ伝10章34節。こういう大胆なことをキリスト自身がおつしやる。29節から、

「²⁹彼らを我にあたえ給いし我が父は、一切のものよりも大^{おお}なれば、誰にても父の御手よりは奪うこと能わす。³⁰我と父とは一つなり」³¹ユダヤ人また石を取りあげてイエスを撃たんとす。³²イエス答え給う『われは父によりて多くの善き業を汝らに示したり、その孰^{いずれ}の業のゆえに我を石にて撃たんとするか』³³ユダヤ人こたう『なんじを石にて撃つは善きわざの故ならず、^{けがしごと}瀆言の故にして、汝人なるに己を神とする故なり』

ここにはつきりと書いてある。「汝は人であるのに、自分を神とするから、これはとんでもない冒瀆者だから、俺たちはお前を石で殺そう」と。

³⁴イエス答え給う『なんじらの律法に「われ言う、汝らは神なり」と録^{しる}されたるに非ずや。

口語訳では、「あなたがたは神々である」と、複数で書いてある。

³⁵かく神の言を賜^{たまわ}りし人々を神と云えり。聖書は廃^{すた}るべきにあらず、³⁶然るに父の潔め別ちて世に遣^{つかわ}し給いし者が「われは神の子なり」と言えばとて、何ぞ「^{けがしごと}瀆言をいう」というか。³⁷我もし我が父のわざを行わずば我を信ずな、³⁸もし行わば^{たとい}仮令われを信ぜずとも、その業を信ぜよ。さらば父の我におり、
我の父に居ることを知りて悟らん』(ヨハネ10・29～38)

こここのところの問答が非常に著しいところです。キリストはもう既に、私たちのことを「神々」とまで言ってくださっている。何も多神教でも何でも無い。それは「神の子」ということなんだ。本来、神の似姿に造られている。私たちが本来神の似姿に造られているものを、再び神の子に回復してくださったのが、このキリストの救いによることは言うまでもない。

イエスは全く神と一つであるといった「無我の我」が、即ち神と一つとして天界からそもそも降りてきたこの迫りのキリストが、本当に人の子でありながら神の子である。「神の子」ということは――「キリストは神か、神の子か」なんて、神学的に一生懸命で論争している方々もあります。それはそれでいいけれども――神の子であるということは、要するに彼自身が本当に神である。彼自身が神をそこに現しているところの方でありました。「父なる神」と「子なる神」とは別です。別であるけれども、それを「神」と言って一向差し支えない。「神の子」というのと「神」というのと、その「神」と「父なる神」とは内容的には――内容的と言いましようかね、関係的には違いますけれども――質は全く一つである。

そういう絶対矛盾の自己同一的な事態を恩寵といい、啓示というのでありまして、そういった意味において、私たちも今度は、パウロやペテロも証言しているように、御霊をいただいている者は、私たち自身が神の子であって、なおその事態を更に先取してキリストは大胆にこのようなことを言っておられるわけです。



●絶対恩寵

イエス・キリストという神の子に信じて在るところの私たちは、一面において、罪の子です。「怒^{いかり}の子」です。罪びとである。神の怒りの対象である怒の子であって、同時に神の子である。キリストは人間であって同時に神の子でしたが、私たちは怒の子、罪びとであって、同時に神の子である。罪びとであって同時に義人であるという、信仰的現実があるわけです。

絶対恩寵によつて、私たちは神の子であるという自覚、そしてやがて、キリストの似姿に化するときが――この地上ではいけないよ――けれども、いつかそれが全^{まった}きに化せられる時が来る。

「父の全きが如く全くなる」

という時が来るという、その恩寵におけるところの展開というものの、これに私たちの本当の安心といえますか、本当の平安といえますか、また本当の希望と、本当の力とがあるのであつて、もし、私たちの実存そのものが、何かそういうものを勝ち得なければならぬなら、少なくとも私はもうダメです。私は自分の実存を問われて、それでもつて神の子になれと言うなら、私は落第します。けれども、

「神の恩寵が、かく私をさせていくから、あなた方をさせていくから、必ずそうなります」

というから、力が私たちの中に、生命が私たちの中に、希望がそこに生じて進んで行く。これを何もかも防ぐことができない。いかなる事態もこれを遮^{さへぎ}ることができない、力強いものがある。それが即ち、私たちの中に、今日主題となつているところの、押し迫りの事実です。御霊のこの迫り、押し迫りによつて、突破によつて、私たちは「神の子」として、いよいよ生命を賭けての押し迫りができ、キリストに向かって生命を賭けて本当にキリストの中に迫り行くところの迫りが、恩寵の事実として喜びとして発動していく。

皆さん、そういうような生き方でしょ。どうか、そういうようにして、進み進んでください。その魂はいよいよ砕かれて、いよいよ平伏しの魂でありまして、驕^{おご}つたら、押し迫りが自分の何か力みとなつたら、必ずそれはダメです。自分の力みとなつたら、やがてパリサイ的傲慢に陥るか、くたびれて信仰をやめるか、どっちかです。イエス・キリストの御霊がわがうちにおいて押し迫りの事実を展開しつつなしたもう。群衆の押し迫りとは質が違ふ。この群衆の押し迫りとは質が違ふところの本当の押し迫りが私たちの中に来る。ここに、私たちは、マルコ伝3章の7節から12節を、その御霊の光をもつて読ましめられたものと信じます。終わります。

